

研究・調査報告書

分類番号		報告書番号	担当
A-52C		16-123	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名（原題／訳）			
Prediagnostic alcohol consumption and colorectal cancer survival: The Colon Cancer Family Registry. 診断前の飲酒量と大腸・直腸がん生存率：大腸がん家族登録			
執筆者			
Phipps AI, Robinson JR, Campbell PT, Win AK, Figueiredo JC, Lindor NM, Newcomb PA.			
掲載誌			
Cancer. 2017 May 15;123(6):1035-1043. doi: 10.1002/ncr.30446. Epub 2016 Nov 8.			
キーワード			PMID
飲酒量、大腸・直腸がん、生存、腫瘍（組織）型、ワイン			27861761
要 旨			
目的： 中等～大量飲酒が非飲酒に比べて大腸・直腸がん（colorectal cancer, CRC）の罹患リスクを上昇させることが示されてきたが、飲酒とCRC生存率に関しては未知のことが多い。			
方法： 大腸がん家族登録における4地域において1997-2007年の間に浸潤性CRCの発症症例を同定した。診断前のCRC危険因子に関連した行動・生活習慣に関する質問票について対象者から回答を得た。危険因子には、ベースラインにおけるワイン、ビール、蒸留酒の飲酒量が含まれる。4,966例のCRC患者を前向きに追跡した。非飲酒者と比較して、CRC診断前の飲酒量が一日平均1サービング（アルコール換算約12-14g）の者の全死亡および疾患特異的（すなわちCRCによる）死亡リスクをコックス回帰にて求めた。アルコールタイプ別、患者および腫瘍の寄与因子別による層別化解析も行った。全ての統計モデルにおいて年齢、性、登録地域、診断年、喫煙歴、体格指数（body mass index）、教育を調整した。			
結果： CRC診断前にビールと蒸留酒を飲む量はCRC生存率と関連を認めなかった。しかしワインを飲む量が多いと予後が若干良好な傾向を認めた（CRC-特異的ハザード比[95%信頼区間]は0.70 [0.48-1.03]、全死亡ハザード比は0.70 [0.53-0.94]であった。層別化解析においても同様の結果を認めた。			
結論： 本研究では、CRC診断前のワイン消費が多いほどCRC生存予後が良好であるという関連が示唆された。			